東京都江戸東京博物館紀要　第７号　2017年３月
Bulletin of the Edo-Tokyo Museum, No. 7, P. 11－57, March, 2017

平成27年度　米国野外博物館への現地調査報告
―野外収蔵施設の修復を中心に

松井　かおる＊1
阿部　由紀洋＊2

目　次

はじめに
1　ルイジアナ州立大学田園生活博物館（LSU Rural Life Museum）
（１）施設概要
（２）ビジターセンター
（３）屋外展示
2　コロニアル・ウィリアムズバーグ（Colonial Williamsburg）
（１）施設概要
（２） 教育センター　美術館コレクションと保存館
（３）コロニアル・ウィリアムズバーグ歴史地区　修復現場
（４）教育普及　その他
3　ヘンリー・フォード博物館　グリーンフィールド・ビレッジ
（Henry Ford Museum and Greenfield Village）
（１）施設概要
（２）ヘンリー・フォード博物館
（３）グリーンフィールド・ビレッジ
（４）ラベットホール　エジソン協会オリジナルライブラリー
4　おわりに

キーワード　修繕工事　修復　野外博物館

はじめに

江戸東京たてもの園（以下、「園」という）の復元建造物は、近年の短時間で多量の降雨を局地的にもたらすゲリラ豪雨や、頻発する台風等の影響により、雨漏り等を起因とする建造物の劣化が深刻な状

＊1 東京都江戸東京博物館学芸員
＊2 江戸東京たてもの園学芸員

況となっている。中でも、「丸二商店」は、雨仕舞いの悪さから柱の一部が腐朽するなど深刻な状態となった。

「丸二商店」は、昭和初期に千代田区神田神保町に建てられた木造の店舗併用住宅で、建物正面部ならびに側面部に銅板を貼り付けた、いわゆる「看板建築」と呼ばれる建物である。1998年（平成10）に園に移築され、昭和10年代の荒物屋として復元、公開した。それから18年が経過し、屋根からの雨漏りや壁面、窓からの雨の吹込みなどで劣化が進行し、ついには通し柱の一部が腐朽するという深刻な状態となった。このため、平成28年度に緊急の修繕工事を実施することとなったが、これに先立ち、伝統的工法と近代的工法とのバランス、現代の部材の補填割合や仕上げ方法など、建造物の安全性を保ちつつ、意匠・構造に関わる観点からの復元建造物の真正性をどのように保全したらよいか、その手がかりを求めて、米国の野外博物館３施設を調査することとなり、2016年（平成28）１月17日から24日、園の学芸員松井かおると阿部由紀洋が調査に向かった。

１　ルイジアナ州立大学田園生活博物館（LSU Rural Life Museum）

（１）施設概要

アメリカ南部、ニュー・オリンズから車で１時間半、ルイジアナ州の州都であるバトンルージュの中心地に位置するルイジアナ州立大学田園生活博物館は、同州の歴史や生活の変遷を伝える建造物を約35棟[1)]移築・復元している野外博物館である。1920年代から長年かけて広大な庭園を手がけたバーデン家の人々が、ルイジアナ州立大学で長年教鞭をとった文化人類学・地理学者フレッド・ニッフェン（Fred Kniffen）[2)]を中心とする研究チームとともに重ねてきた「民俗建築」研究の成果を基礎として、1972年、同大学がバーデン家所有の敷地、建造物、庭園、さまざまな生活資料などを同家から寄贈を受け、1981年に田園生活博物館として開館した。野外博物館の敷地は25エーカー（約10ha）で、今回調査した施設の中では園と規模や復元棟数が近い。博物館では18世紀から19世紀、20世紀初頭の建築や暮らしぶりを展示している。ルイジアナ州は人種多様な地であり、それぞれ持ち込んだ自国の文化が生活様式に反映されており、建築にも影響を与えている。ここでは、建物も生活用品と同様に生活を表わす資料ととらえており、それらを通じて、ルイジアナ州のたどってきた歴史や文化を理解することに主眼を置いている。州内の建造物に限って移築している点、現地保存ができない歴史的建造物を移築・復元している点、庶民の暮らしぶりを展示している点など園との共通点も多く、館長のデビッド・フロイド氏（David Floyed）（写真１－⑶－①－13）は、「ぜひ、今後も継続的に交流をはかりたい」と述べた。

復元建造物内に、現代的な電気や空調の設備をあえて設置していないのもこの博物館の特徴である。ボランティアによる見学ツアーは行われるが、それ以外、監視員を配置していない。ハーベスト・デー、クリスマス、鍛冶屋イベント、家具作りイベントなど、年に20日程度季節に応じたイベントがあり、その時はボランティアや学芸員がコスチュームを着てワークショップなどを行う。ボランティアスタッフの８割はルイジアナ（とりわけバトンルージュ）に地縁があり、祖先から伝わる伝統の技術を守っているという。また、温暖な気候のため、アメリカの野外博物館の大半が休館する１月から３月の寒冷期も

開館している。

館の管理・運営はLSU Foundation Developmentという非営利団体が行っており、経費の95％を入館料やショップの売り上げで賄っているとのことで、このほか、館内での結婚式、テレビ・映画のロケ地対応なども行っている。視察時もかなり大規模な撮影が行われていた。案内をしてくださったジャン・ベクネル（Jean Becnel）氏（写真１－⑶－①－13）は建築担当の学芸員で、撮影にも立ち会うとのことだった。

（２）ビジターセンター

野外展示エリアの手前に大規模なビジターセンター[3)]があり、展示されている建造物における暮らしぶりや社会背景を知るために役立ついくつかのテーマ（奴隷、入植者、ルイジアナにおける建築の特徴、産業構造、サトウキビプランテーション、市民戦争とその後の社会変化、産業革命など）について生活民俗資料やパネルを用いてわかりやすく展示している（写真１－⑵－１～８)。イベント時には、この空間もワークショップの会場に使われる。さらにその先には乗物や木工道具類、その他多くの生活民俗資料を収蔵展示しているコーナーがあり、そこを抜けると野外展示エリアが始まる。ここには、住民から寄贈を受けたという立派な角を持つウシの「スター」と「ストライプ」が飼われている（写真１－⑶－①－1)。国歌のメロディーを笛で吹くと反応する。将来的には、19世紀まで運搬や農作業の動力を牛が担っていたことを示すのに活用したいとのことだった。

（３）屋外展示

①プランテーション居住区

野外展示は①奴隷小屋他プランテーション居住区、②南部高地の民家ゾーン、③湾岸地域の民家に大別できる。①は1970年代、スティール･バーデン氏（Steele Burden）が住居のみならず仕事場も処分されずに残っていたウェレム・プランテーションの奴隷小屋群を保存するため、緊急避難的にこの地に移築したもので、当初は公開を目的としていなかった。1981年に公開を始めるにあたり、19世紀のプランテーション居住区が再現されるように建造物を配置した。農場主が奴隷の動きなどを監視できるようコの字型に建物を配置した様子は、奴隷制下の生活を、建築を通して今に伝えるものである。そしてそれぞれの家には調度類が配置され、当時の暮らしぶりが伝わるよう工夫している。

写真１－⑶－①－２～6は農場主の家（Overseer's House）の外観と内部の様子である。食堂や寝室に暑さや虫除けの工夫が見られる。食堂のテーブルや棚には食器などこまごましたものが並び、監視員もいないが､盗難はほとんど無いという。暖炉の横には､ルイジアナ地方独特の巨大なキャビネット（家具）が置かれている。ニューオリンズ在住の通訳の女性は、現在でもこの地方ではこうした家具が親しまれ、使われていると言っていた。火災を避けるため、台所は別棟になっている。キッチン棟にも、少し前まで誰かが調理していたかの如く道具類が並んでいる（写真１－⑶－①－11)。ここもイベント時には女性のボランティアスタッフが料理の腕を振るう場となる。ハーブなどを植えたキッチンガーデンが隣接しており、よく手入れされていた（写真１－⑶－①－12)。

農場主の家から見渡せる位置に奴隷小屋が並んでいる。内部は質素な造りである（写真１－⑶－①－14）。さらにサトウキビのプランテーションを示す砂糖小屋やサトウキビひきの道具が置かれているほか、コの字型の中心地には井戸もあり、居住区の外れには拘置所もある。そのほか、郵便局（写真１－⑶－①－７）、雑貨屋（写真１－⑶－①－８）、小学校校舎、鍛冶屋の仕事場、鳩小屋[4]、鶏小屋なども配置されている。鍛冶屋の仕事場ではイベント時に鍛冶屋の末裔がボランティアでワークショップを行う。

ジャン氏によれば、建造物の修復について、手法や材料の選択などを館長と相談しながら決定するが、基本的には修復担当者の裁量に任されている。修復担当者は、日常的に建造物を点検調査しており、その積み重ねが的確な修復へとつながっている。そして、小規模な修復を積み重ねることの方が、ある程度まとめて修復工事を行うよりも維持管理費を低く抑えられるとしている。まとめて発注すると材料費は抑えられるかもしれないが、人件費がかさんでかえってコスト高になるとの見解である。

修復に際して用いる材料は、現代のものを使用することが多いようである。たとえば、郵便局として使われていた建物のバルコニー部分の修復では、２本の木材を１本の木材として使用している例が見られた（写真１－⑶－①－７）。また、プランテーションの農場主の家の屋根裏で使用している垂木も、本来は１本の木材を使用するところを２本の木材を並べて代替するといった手法が用いられていた（写真１－⑶－①－10）。これらは基本的には人目につかない、あるいはつきにくい部分に用いられており、その時に取り換えられた旧材については、同じ建物内で取り替え材として再利用、あるいは保管している。見えない部分でのこのような修復方法は、やはりコストとの兼ね合いから用いざるを得ないというのが実情のようである。一方、人の目に触れる部分については、たとえば同じ農場主の家では、屋根の葺き替えを２面あるうちの１面で実施したが、1970年代まで使用されていた材料を苦労しながらそろえて葺き替えたという（写真１－⑶－①－９）。なお、葺き替え作業は、14～70歳代のボランティアスタッフ10人が従事し、１週間で完成させた。このように、人の目に触れる部分では、極力建築当時に用いられていた材料を使用し、人目につかない部分では現代の材料を使用して修復している。なお、修復作業を行ったことで、周囲との色味の違いはどうしても発生することであるが、この博物館では修復箇所をまわりと合わせる、色合わせの作業を行っている。

②南部高地の民家ゾーン

次に訪れたのはサイプレス（イトスギ）の納屋（写真１－⑶－②－１）、屋外のオーブン（写真１－⑶－②－２）、奴隷制下の自由黒人が自ら建設した教会（写真１－⑶－②－３）、バーデン家の墓も設置されている墓地（写真１－⑶－②－4a, b, c）、開拓者の小屋にともなうジャガイモ備蓄小屋（写真１－⑶－②－５）、トウモロコシ貯蔵小屋、ドッグトロット･ハウス[5]（写真１－⑶－②－６）、かま焚き納屋、シロップハウス等である。

ジャガイモ備蓄小屋は特別に解錠して内部を見せていただいた。建物の高さが低く、床も張っていない。ルイジアナ州は高温多湿な環境であるため、建物にはバルコニーを設けて日影を作る工夫をしたり、風の通りをよくするために、高床にしたり窓の配置を工夫するといった特徴が見られる。ドッグトロッ

ト・ハウスはその典型といえる住宅である。この屋根の下地にはタールを塗った防水シートが用いられている（写真１－⑶－②－６、6a、6b）。

防水シートは屋根の漏水をより確実に防ぐために使用されたが、逆に屋根内部から湿気が抜けなくなり、かえって傷みを早める結果となってしまった。結局は屋根を大がかりに修復しなおすこととなり、現代の工法が裏目にでた事例となった。

2005年、ルイジアナ州はハリケーン・カトリーナに襲われ、甚大な被害が出た。多くの家屋も被害にあったが、これらは現代的な工法のものが多かったようである。その後の復旧作業では、古くからの「息ができる」建物が見直され、新たな建築の基準となった。それには、この博物館に移築された建物が一役買ったということである。

③湾岸地域の民家

最後に訪れたのは、湾岸地域に居住したクレオールの住居である。クレオールとは、ルイジアナ買収[6)]以前に植民地で生まれたフランス人やスペイン人、アフリカ人のことで、さまざまな文化が住居からうかがえる。

ドイツ系ベルギー人の民家（写真１－⑶－③－１）は2005年に移築された、18世紀に入植した世代の家で、伝統的な工法を受け継いでいる。土壁を塗る際、日本の木舞に類似した材を用いており、そのことがわかるように、一部材を露出させて展示している（写真１－⑶－③－1a）、園の民家同様、土壁は蜂の被害を受けて、無数の穴があいていた（写真１－⑶－③－1b）。家内の構造もトラス構造の屋根など伝統的なアカディア[7)]の工法が用いられている（写真１－⑶－③－1c）。このほか、アカディア人の家、ショットガンハウス[8)]が隣接している。

２　コロニアル・ウィリアムズバーグ（Colonial Williamsburg）

（１）施設概要

ヴァージニア州ウィリアムズバーグはイギリス植民地時代の一時期（1699年から1780年）の首都であった頃の町並みを今に伝える、いわゆる歴史保存地区で、埼玉県川越市の蔵造りの町並みや飛騨高山の合掌造りの民家集落といった「伝統的建造物群保存地区」に相当するような場所である。アメリカ独立戦争が勃発した1775年に焦点をあてた施設で、長さ１マイル（約1.6㎞）、幅800ｍの範囲の中に、600棟にも及ぶ建物が残り、そのうち88棟が植民地時代からの建物である。

20世紀初頭、牧師として赴任したW.A.R.グッドウィン（W.A.R. Goodwin）は、ジョン・ロックフェラー２世（John D. Rockfeller Jr.）らとの共同開発により、植民地時代のウィリアムズバーグを再現すべく、1790年よりのちに建てられた建物を解体し、植民地時代に建っていた建物を、その場所に復元した。現在もその作業は進められており、発掘による成果や歴史資料による考証など、科学的な根拠に基づいて復元され、正確さを保つことを使命としている。これらの建物を復元あるいは修復するにあたっては、材料の処理方法や建物の取り扱いなどを示した内務省国立公園局発行のガイドラインがあるほか、ウィ

リアムズバーグ市内でも建築審査会が設置され、建築のガイドラインが示されている。これらに則って復元・修復を実施することで、歴史的な町並み形成の真正性を担保している。

年間入場者数は、イベントなどのチケット購入者が75万人、リピーターは100 ～ 110万人。施設の広報ツールとしては、広報誌を年４回発行しており、そのほか専用アプリを開発している。歴史地区には強力なWi-Fiを設置している。

（２）教育センター　美術館コレクションと保存館

施設を管理･運営するコロニアル･ウィリアムズバーグ財団は、コロニアル･ウィリアムズバーグ歴史保存地区、その北に位置するビジターセンターとは離れた一画に、「教育センター」という施設群を持っている。今回お話をうかがった、建築物保存部門部長マシュー・ウエブスター氏（Matthew Webster）のオフィスや美術館の収蔵庫、学芸員の研究室などがある「美術館コレクションと保存館」のほか、ジョン・D・ロックフェラー・Ｊｒ研究図書館、ブルトン・ハイツ・スクールが広い敷地の中に設置されている（写真２－⑵－１～３参照）。

建造物の維持管理を担当するスタッフは４人おり、必要に応じてその下に塗装班、大工班、鍛冶屋班、金属班（釘も作る）など組織内でチームを編成し、チーム内で修復などに対する方針が決定され、実施される。また、建物の修復については長期計画が策定されており、たとえば外壁などの塗装について年間で約70棟、10年間で１サイクルで計画されている。費用は年間で約45万ドルである。このほか、建物内の照明設備などのメンテナンスといった予防保全の費用として、年間17棟分、２～ 7.5万ドルが確保されているという。

復元や修復の現場は囲いなどをせず、公開しながら実施している。これは、見る人に建物の保存に対する理解や関心を促進するとともに、寄付金の増加にもつながるという。

修復にあたっては、できる限り伝統的な工法を用いることにしている。1940年代、基礎と土台をボルトで緊結する、その当時では一般的であった手法を用いたところ、そのボルトのせいで基礎が傷んでしまったことがあったという。そして材料については、新しい材料と古い材料を混用することはしない。たとえば現代の木材は人工乾燥の技術が進み、完全に乾燥しているため、水分を吸収せず膨張しない。一方、古い木材はその点で「あそび」があり、使いやすいという。また金属についても同様で、新しいものと古いものでは熱による膨張率が異なり、混用すると水が入り込む余地が生まれ、建物を傷める可能性があるという。

そこで、古い材料を使用することとなるが、これらは入手が困難なものでもある。この施設では、米国内で入手が困難なものは、もともと英国領であったことから英国から材料を調達するほか、その材料の原産国から取り寄せることにしている。また、煉瓦などは、当時の材料や製法を検証し、自前で窯を製造し焼成したものを使用している。金具類なども自前で製造したものを使用するなど徹底している。新しい材料を用いることもあるが、その際は材料にマークを入れるなど識別できるようにしている。以前、補修する際にその材料の新旧が判然としなかったことがあり、困惑したという。

そして、この施設でも周囲の材料と調和させるために色合わせを行っている。これは、見る人に混乱

を与えないための配慮だという。このほかバリアフリー対策として、建物へのダメージを最小限に抑える範囲でスロープやエレベータを設置しているが、基本的には建物に関する映像を設置したり、タブレットの貸し出しなどで対応している。

この施設にある建物の一部では、所有者が居住し続けていたり、寄附者が使用しているものがあり、創建当初の設備を変更しないよう工夫しながら暮らしているという。

修復などによって取り外された古い部材などは、倉庫などで保管している。それらの部材は、併設する美術館でテーマを設定して展示するなど活用されている。見かけは今一つかもしれないが、それらの部材は建築上大事な働きをしている、ということを伝えていくことが大切であるという。このほか、大工道具や部品について書かれた書籍など、建築に関わる様々な資料を積極的に収集しており、それらを調査研究することで、伝統的な工法や材料を用いての復元や修復に反映させている。

ハリケーンなど自然災害に対する取り組みとして、その到来が予測される場合、組織内で対策チームを立ち上げ、対応している。建物の窓を保護（いくつかの建物については板を打ち付けて保護）するほか、窓近くにある物の移動、土嚢の設置、排水関係の設備の点検などを実施、要所に工具類の入った緊急対応キットを配置するなどの対策をとるとのことであるが、実際にハリケーンに襲われてしまうと何もできない、という。

（3）コロニアル・ウィリアムズバーグ歴史地区　修復現場

この地域は１月から３月、寒冷期で訪れる人はほとんどいないため、各施設のメンテナンスが行われる。ウエブスター氏のご厚意で、インタビュー調査の後、修復現場の見学をさせていただいた（写真２－⑶－１）。

①議事堂

1705年に完成した当時の建物を1930年代に再現した建物（写真２－⑶－①a）。入口部の床のタイルはイギリスから取り寄せたものを使用している（写真２－⑶－①b）。冬季の休業期間を利用して、家具などの修復を行っていた（写真２－⑶－①c）。建物の基礎は建設当時のものを活かし、当時の材料や製法で作られた煉瓦やモルタルを新たに足している（写真２－⑶－①d）。

②市場（マーケットスクエア）

米国内ではすでに失われてしまったが、英国に現存する市場の建物を参考に復元工事を行った（写真２－⑶－②a, b, c）。材料やその加工方法などは、職員が指導して工事が進められた。照明は建物本来のものに加え、見学者への配慮のための補助的な照明が設置されている（写真２－⑶－②d）。補助照明は建物の形状を大きく変更しないよう、必要最低限な数値にとどめた。

③煉瓦作業場

①の基礎など、歴史地区の建造物に用いる煉瓦は自前で製造している。土をこねて煉瓦に成型し、（写真２－⑶－③a）成型した煉瓦を干したのちに（写真２－⑶－③b）窯で焼成する（写真２－⑶－③c）。

（4）教育普及　その他

コロニアル・ウィリアムズバーグには、地元ヴァージニア州の小学５年生が必ず訪れるほか、カリフォルニア州の小学５年生がアメリカ史の授業の一環で修学旅行で訪れる。「エレクトロニック・フィールド・トリップ」というオンライン講義も行っている。ボランティアは約800人。受付のスタッフが対応し、各ボランティア業務の需要と供給を調整する。活動内容はツアーガイド、発掘調査、考古資料整理、木工芸、コンサベーションラボなどがある。インターンも積極的に受け入れており、コレクション部では１年間のコース１名、半年間のコース２名が活動している。大学との連携では、ケンタッキー大学、ジョージア大学、ノースカロライナ大学等と共同研究プログラムを持っている。そして、地域連携として、市の建築審査委員会に当該財団から２名の委員を出している。ただし、コロニアル・ウィリアムズバーグに関する案件を審査する時はこの２名の委員は出席しない。

当該財団は非営利団体だが、資金集めのための寄附プログラムを行う場合がある。企業のスポンサーシッププログラムとしてはマイクロソフト、エリクソンから、PC端末やソフトの提供を受けている。また、考古資料の保存プログラムでも資金援助を受けている。ハロウィンの時には、M&M’sを開発したフォーレスト・マースから、10万ドル相当のキャンディーが寄附された。このほか、年に一度、２週間ほど「議事堂」内でヴァージニア議会が開催される。

３　ヘンリー・フォード博物館　グリーンフィールド・ビレッジ（Henry Ford Museum and Greenfield Village）

（1）施設概要

ミシガン州ディアボーンの、フォード・モーターが本社を置く地に、1929年のエジソンによる電球の発明から50年経ったのを機に開設された博物館。グリーンフィールド・ビレッジには全米各地から移築された建物83棟があるほか、蒸気機関車や「Ｔ型フォード」などの乗り物もあり、日本の「博物館明治村」と共通点を持った野外博物館である。

（2）ヘンリー・フォード博物館

グリーンフィールド・ビレッジは冬期にあたる１月から３月は休館しているが、巨大な屋内展示施設である「ヘンリー・フォード博物館」は年間を通して開館している。質問事項のインタビューの前に、同館学芸部長・歴史資料部門チーフのマーク・グルーザー氏（Marc Greuther）から同館の主要コーナー（①～⑩）をご案内いただいた。⑪から⑳はインタビュー後の見学から抜粋した。

①プレクター・プロムナード

地元の有力者でエジソン協会の熱烈な支持者だったハインツ・プレクター（Heinz Prechter）の名を冠した、距離が長く、装飾的な内装のエントランス（写真３－⑵－１）。

②ヘンリー・フォード博物館の基石

1929年、エジソン協会発足時にトーマス・エジソンが記したサインとルーサー・バーバンク（Luther Burbank）[9] のスコップで構成されるオブジェがある。プロムナードを抜けた正面入口に設置され（写真３－⑵－２a, b)、「自然保護と技術革新の対立」を示しているという。

エジソン協会の活動は、アメリカの歴史を教科書ではなく、一般的な生活道具などを用いて教えることを目的とする学校として始まり、年を追うごとに規模が拡大し、扱うテーマも多岐にわたるようになった。エジソン協会はフォード株式会社から独立している非営利団体で、当館を運営している資金の65％をイベントや入場料でまかなっている（残りはフォード基金、各企業等からの寄附)。ただし、フォード一家は協会の理事会には深く関わっている。

③ローザ・パークス・バス（Rosa Parks Bus）

アフリカ系アメリカ人の公民権運動のきっかけとなった「モンゴメリー・バス・ボイコット事件」[10] の舞台となったバスが、アラバマ州バーミング市の一角にうちすてられているとの通報を受け、2001年に収集して修復。「リンカーンの椅子」等を展示している「万民のための自由と正義」コーナーで公開した（写真３－⑵－３)。オバマ前大統領が来館時、バスに乗り込み、シートに座った姿が報道された。

④電話機コレクション、バイオリンコレクション

ローザ・パークス・バスの向かいのケースには草創期から現代までの電話機が並んでいる（写真３－⑵－４)。これはヘンリー・フォードのコレクションのひとつで、トースター、アイロン、靴など日常使われる生活道具を熱心に集めていた。公開しているのはコレクションの５～６％程度。これらとは異質のコレクションがバイオリンコレクションで、ジャズよりカントリー・ミュージックを好んだヘンリー・フォードは、自らもバイオリン演奏を趣味としていたため、バイオリンの名器をコレクションした（写真３－⑵－５)。これらは希少性が高く、しばしば世界各地に貸し出されている。

⑤ダイマクション・ハウス（Dymaxion house）

建築家で発明家のバックミンスター・フラー（Buckminster Fuller）が作った、未来の家「ダイマクション・ハウス」は普及しなかったが、時代の象徴として、あえて展示している（写真３－⑵－６a, b)。

⑥「Your place in Time」（人と技術の豊かな交流について、20世紀の５世代の暮らしを概観して探索する）コーナー

５世代とは、「進歩主義世代（1890年から1919年生まれ)」、「戦争世代（1920年から1945年生まれ)」、「ベビーブーム世代（1946年から1964年生まれ)」、「ジェネレーションＸ（1965年から1979年生まれ)」、「次世代（1980年代～2000年代生まれ)」。各時代のジオラマ展示を追っていくと、「進歩主義時代」の展示は活動写真館と最新型自動車（写真３－⑵－7a)、「戦争世代」の展示は爆弾と灯火管制下の暮らし（写真３－⑵－7b)、「ベビーブーム世代」の展示は観測ドーム型住居での共同生活、ビートルズなど（写真３－⑵－7c)。「ジェネレーションＸ」の展示は忠実に再現された、1980年代のティーンエイジャーのベッドルームで、ボブ・マーリー（Bob Marley）のポスター、カセットコー

ダーつきＬＰプレーヤー、初期のワープロなどが展示されている（写真３－⑵－7d, e）。清掃のスタッフは、何度注意しても、ベッドの上の散乱している衣服をきちんと片付けてしまうとのことだった。「次世代」はさまざまなコンピューター機器（写真３－⑵－7f）が展示されている。

これらに隣接して、各世代のショーケースがあり、その時代に流行したさまざまな資料が展示されていた（写真３－⑵－7g, h）。ミレニアムを記念して作ったコーナーで、テーマが古くなったので、2016年限りでこのコーナーを終了して違う展示を行うとのことだった。ショーウインドー展示は見た目は類似しているが、1960年代から2000年までを単に10年区切りで展示している江戸東京博物館と、上記の５つの各世代で区切っている当館では、コンセプトも展示物も異なる。

⑦世界最古の蒸気機関ほか動力革命

蒸気機関、ガス、電気など、フォードは初期段階から大型資料を精力的に集めた（写真３－⑵－８a, b）。

⑧初期の飛行機

ライト兄弟が作った飛行機「ライト・フライヤー号（Wright Flyer）」の実物大模型。真正性が高いレプリカとして知られている。開館時には、単に実物大模型を館内に吊り下げるだけの展示だったが、現在では、飛行時に見える陸地の景観や気流の音などを加えて、よりリアルに演出している（写真３－⑵－９）。なお、博物館正面入口の突き当りの上方には、ダグラスＤＣ３飛行機が展示されている。

⑨ドライビング・アメリカ

馬車の車体にエンジンをつけたような初期の自動車に始まり、年代別、種類別に、国の内外から自動車史上重要な自動車を集めた展示は圧巻（写真３－⑵－10a, b, c）。

⑩機関車

アメリカ最大の屋内展示場ならではともいえる機関車２台の展示（写真３－⑵－11a）。裏には鉄道模型コーナーがあり、幼児が夢中で眺めている姿が印象的だった（写真３－⑵－11b）。

⑪大統領専用車

ケネディ所用のリムジン（1961年製、1963年の暗殺時に乗ったもの）、レーガン所用のリムジン（1972年製、1981年のレーガン暗殺未遂時に乗ったもので、ニクソン、フォード、カーター、ブッシュと歴代の大統領も使った車）など５台の専用車が展示されている。（写真３－⑵－12a, b））

⑫ドライビング・アメリカ番外編

一般車だけでなく、レーシングカー、営業用装飾車なども多数展示している。その他、エンジンの仕組みを見せるなど、さまざまな工夫が凝らされている（写真３－⑵－13a, b, c, d, e）。

⑬Ｔ型フォードの構造

実物をパーツごとに分解して吊るした立体模型（写真３－⑵－14）。

⑭Home Arts

八角形の土台を四分割して壁を立て、４つの時代の台所を再現しているユニ－クな展示。

・1700年代末　アメリカ北東部の中流家庭の台所（写真３－⑵－15a）

・1840年頃　　アメリカ東部の町または村の中流家庭の台所（写真３－⑵－15b）

・1890年頃　　アメリカ中西部の地方の台所（写真３－⑵－15c）

・1930年代　　中流家庭の台所（写真３－⑵－15d）

⑮博物館ギャラリー

「国道66号線Roadside America ジョン・マルゴリー（John Margolies）のレンズを通して」のエントランス・デザイン（写真３－⑵－16）

⑯農機具展示物のフォルム写し取り

備え付けの紙を凹凸の上にのせてクレヨンでこすると、展示中の農機具のフォルムが写し取れる（写真３－⑵－17）。子供向けツール。

⑰発電体験装置

ハンドルを回して人力で発電し、電灯をともす。初期の頃からあるが、担当者によると、人気があるため、よく壊れるという（写真３－⑵－18）。

⑱デザインコーナー

④同様、フォードが集めた豪華なシャンデリアなどの照明具や各年代の家具、椅子などが広大なスペースに並んでいる（写真３－⑵－19）

⑲ストーブコレクション（写真３－⑵－20）

こちらもフォードが個人的に収集したストーブ

⑳年代別音楽視聴コーナー　1960年代（写真３－⑵－21）

⑥と関連して設置されていた。

（３）グリーンフィールド・ビレッジ

1927～28年に、フロリダ州フォートマイヤーズにあったトーマス・エジソン（Thomas Edison）の研究所を移築したのが最初であり、44年にフォードの生家を移築したのがフォードが手掛けた最後となった。このほか、ライト兄弟の生家や飛行機の開発をしていた自転車屋、作曲家のスティーブン・フォスター（Stephen Foster）の家、辞書の編纂などで知られるノア・ウェブスター（Noa Webster）の生家、さらにはフォードの自動車工場を１／４に縮小した建物などもある。前述の２施設と異なり、アメリカの文化史や科学史などで足跡を残した著名人の生家や関連施設が多数移築された、アメリカ文化史を物語るような施設となっている。

冬期休業中のグリーンフィールド・ビレッジ内を、事業企画部門課長のジム・ジョンソン氏（Jim Johnson）の運転及び案内のもと、Ｔ型フォードの車上から構内を見学した（写真３－⑶－1a, b～写真３－⑶－５）。ライト兄弟の家と自転車店のみ開錠していただき、室内も見学した（写真３－⑶－6a, b, c, d）。構内では馬車用に飼われている馬も見かけた（写真３－⑶－８）。

①ファイアストーンの納屋　1830年代（写真３－⑶－２）

②ノア・ウエブスター（辞書の編集者・教育者）の家　1823年（写真３－⑶－３）

③スティーブン・フォスター（作曲家）の生家　1830年代（写真３－⑶－４）

④フォードの工場レプリカ（４分の１サイズ）　創建1903年　建築1945年（写真３－⑶－５）

⑤ライト兄弟の家　1870年代

室内にはクリスマス装飾が残っていた。撤収作業中。室内には家具や小物類を置き、当時の暮らしぶりを再現している（写真３－⑶－6a, b, c, d）

⑥ライト兄弟の自転車屋　1875年頃

ライト兄弟が飛行機製作をしていた自転車屋。開館時には初飛行の様子を、ライト兄弟に扮したアクターが１日４から５回、15分程度演じる（写真３－⑶－7a, b, c, d）

⑦二頭立て馬車用の馬

開館時、ビレッジ内を走る二頭立ての馬車のために飼われている白い馬がファイアストーンの納屋付近にいた（写真３－⑶－８）

（４）ラベットホール　エジソン協会オリジナルライブラリー

ヘンリー・フォード博物館とグリーンフィールド・ビレッジの間に建っているラベットホール[11)]（写真３－⑷－2b）内にあるエジソン協会のオリジナルライブラリーに、学芸部長　歴史資料部門チーフのマーク・グレイザー氏が、館の主要メンバーを集めてくださり、グリーンフィールド・ビレッジを案内していただいた事業企画部門課長のジム・ジョンソン氏も加わって、修復に関する調査を行った（写真３－⑷－1a, b）。オフシーズンのため、ホールでも修復が行われていた（写真３－⑷－2a）。

そもそも、設立者のフォードの理念としては、ここで働くスタッフには建築等の技術を保持していることが求められていたという。そのためか、建物を維持管理する専門部署が設置されたのは1970年代と、開設からかなり時間が経っている。年間の予算は50万ドルで、建物の修復や塗装のほか、施設内の設備の維持管理などに充てられている。そして、軽微な修復は、施設内の専門スタッフが実施し、大がかりな修復は、外部の業者に発注している。そのために、日常的に建物の点検を行っているほか、施設に関わる様々なスタッフから不具合個所についての報告が寄せられ、プライオリティの高いものから順に修復を実施している。一方、新規に建物を移築する際には、施設内に委員会を設置して意思決定をし、別途資金を調達したうえで建設業者に発注している。

建物の補修にあたっては、外から見える部分やオリジナルを保ちたい部分は、伝統的な工法や材料を用い、見えない部分は現代の工法や材料を用いている。木材などは、同じ年代、同じ産地のものを使用することを心掛けている。現代のものを使用するときは、元の材料に影響を与えないか検証した上で使用しているほか、使用箇所を撮影するなど記録している。また、ほかの建物で使用していた部材の転用はしていないが、ドアノブやガラスなどをたまに再利用することはあるという。しかし、金物類などは新しく作ることが多く、館のボランティアには、このような金物類を製作できるスタッフがいる。そして、鍵のように壊れやすいものやセキュリティが求められるものは新しいものを使い、古色をかけるなどしている。このようにして修復した部分については、他の２施設と同様、周囲と違和感が出ないよう色合わせを行っている。同様に、修復の結果取り出された古い部材については、保管をしている。ただ

し、ドアなどの建具やデザイン性の高いものなどが保管の対象で、部分的に取り替えたことによって生じた小さな部材などは、記録にとどめておくのみで処分している。

この施設では、積雪や低温による被害が発生することがあるようで、低温により壁内部にある樋内部で水が凍り、雨樋が膨張して壁が破損した、ということがあったという。また、洪水による被害もあり、水を掻き出すための排水ポンプが設置されている。さらにバリアフリーへの対応だが、オリジナルの構造を変えない、ということからスロープなどは設置していない。その代わりに映像で補完したり、建物にいるスタッフがタブレットなどを用いて説明するといった対応をとっている。

おわりに

今回調査をした３施設において、建造物の移築復元や修復の実際をヒアリングした結果は表１のとおりである。程度の差はあれ、伝統的な工法や材料などを用いることが肝要であることを痛感した。園の「丸二商店」は、壁内部にラスボードを使用し、その上にプラスターを塗り仕上げとしている。一方、外側は、ラスボード下地の外側に間柱も入れ、そこに直接下見板を打ち付ける、という工法で仕上げている。このため、下見板に経年劣化で割れが生じるとそこから雨水などが入り込み、直接ラスボードを伝って部屋内部に雨染みが発生した。本来ならばラスボードではなく、土壁とするところであり、多少の雨水であれば吸収し、雨染みの発生をおさえることができたであろう。結果として、現代的な工法や材料が災いした事例となってしまった。移築復元工事や修復工事を実施するにあたっては、費用や工期と折り合いをつけながら、伝統的な工法や材料を用いることが結局は建造物自体の延命につながっていく、ということであろう。現在、園の修理後の方針としては「建造物を今後も良好な状態で保存していくために、現在の工法や技法を取り入れることも可とする」としている。今回の事例を踏まえて、現代の工法や技法、そして材料を用いる際には十分な検証が重要である、ということを肝に銘じたい。

また、今回「丸二商店」の特徴である銅板張りのファサードの修復について、全部新規材で作り直す案や、部分的に古い材料を使用する案、そして大ばらしをして内側を修復した後に改めて張りなおす案が提示されたが、結局は、コーキング材を打って水の浸入を防ぎ、将来的によりよい修復方法が見つけられるよう、引き続き検討していくこととなった。調査先のコロニアル・ウィリアムズバーグでご教示いただいたように、新しい金属と古い金属との膨張率の違いにより、混用はリスキーであるということは、「丸二商店」のファサード修復にあたってはよくよく考慮すべき点であろう。

ほかに３施設で共通しているのは、修復した箇所については周りと色味を合わせる、ということであった。近年、園の修復工事では色あわせをしない方針を採っている。これは、平成26年度に実施した、英国の野外博物館の施設を調査した際、英国では修復したあとの色あわせをしないという調査結果を踏まえたものである。この点について、来園者の感想を聴取したいところであるが、米国の事例をふまえて、再度整理をする必要があろう。「丸二商店」の修復では、外壁など一度はずしたものはそのまま元に戻す、という方針なので色あわせの必要は生じないが、このほかの建造物の修復については、もう一度確認が必要ではないだろうか。

最後に、どの施設でも修復工事の方針や使用する工法・材料について深い造詣を持った専門スタッフがおり、工事にあたっても直接指導できる人材が十分確保されている、という点が園とは大きな違いであった。これからも貴重な歴史資料として建造物を維持管理し、後世へと確実に伝えていかなければならない園として、このような組織作りは目標とすべきところであろう。しかし、現時点では日常的に各建物を点検調査し、小規模なものでも確実に修復を行い、その積み重ねを知識と経験としていく、という段階なのかもしれない。園のスタッフとして、建造物に対するあらゆる知識を身につけていなければならない、ということを痛感した。

【註】

１）田園生活博物館の案内図（図１）には42のポイントが記載されているが、31は資料の収蔵展示をしている蔵（博物館の機能として作られたもの）、34はビジネスセンター、38はエントランス付近に置かれた丸太、39はエントランスであって、復元建造物ではない。また、９のキッチンガーデン、18の井戸、20のアンクル・ジャックを除くと35棟になる。19, 37のサトウキビをひく機械は判断がつきかねるので「約」とした。

２）ニッフェンは「民俗建築（Folk Buildings）」:〈ユニークな形式、外観、構造を持つ古い建造物は人々の文化的起源の跡をたどるために有用である〉という理論の草分け。1929年からLSUで教えるかたわら、州内でさかんにフィールドワークを行った。「HABS」（Historic American Buildings Survey、アメリカ歴史的建築調査 米国議会図書館のオンラインコレクション）にはニッフェンの研究所が調査を行った２件の建造物が登録されている。彼はルイジアナ地域の奴隷や労働者（一般小作人等）の暮らしぶりを精力的に調査するほか、ドイツ、スペイン、ケイジャン（フランス系カナダ人移民）、アイルランド等から移住した人々の文化が住居に反映していることをそれぞれの民家調査から導き出し、野外展示でそれを示している。

３）2010年に完成した。

４）18世紀、フランス人の入植時、鳩は食用として持ち込まれ、その後繁殖していった。鳩小屋は食用の鳩を飼うための施設だった。

５）左右対称に作られ、入口の前にデッキをつけるなど、暑さを避ける、ルイジアナ特有の建築。

６）1803年にアメリカがフランスから210万㎢を越える領地を1500万ドルで買収した。

７）アメリカ合衆国メイン州東部とカナダ ノバスコシア州に相当する地域の古名。フランス人入植者によって名付けられた。彼らの一部がルイジアナ地方に定住した。

８）長方形の平面をもつ小規模な住宅。ルイジアナ州はじめアメリカ南部の小都市で多く建てられた。

９）植物学者でジャガイモ等の品種改良を行った園芸家。

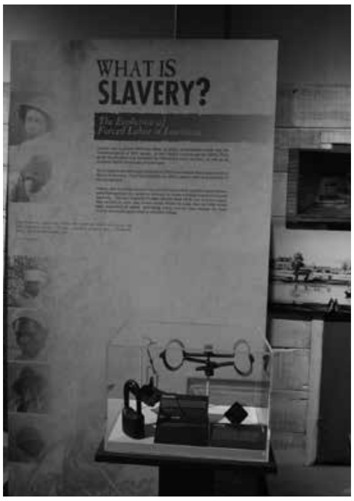
10）1955年、バスの座席は白人が前、黒人が後ろで、混雑時は白人優先で前から席を占めるというルールに従って、運転手が黒人女性（ローザ・パークス）に、白人男性に席をゆずるようにと勧告したが、拒絶したため、「人権分離法」違反の容疑で逮捕された事件。

11）ヘンリー・フォードが夫人とダンスを楽しむために建てた、ボールルームが主体の娯楽施設。現在は結婚式の披露宴などに利用している。

＊以下、各施設で撮影した写真と各施設の平面図を掲載する。平面図には本文に対応する数字を付した。

1．ルイジアナ州立大学田園生活博物館　写真一覧

（2）ビジターセンター



１－⑵－１　奴隷関係の展示

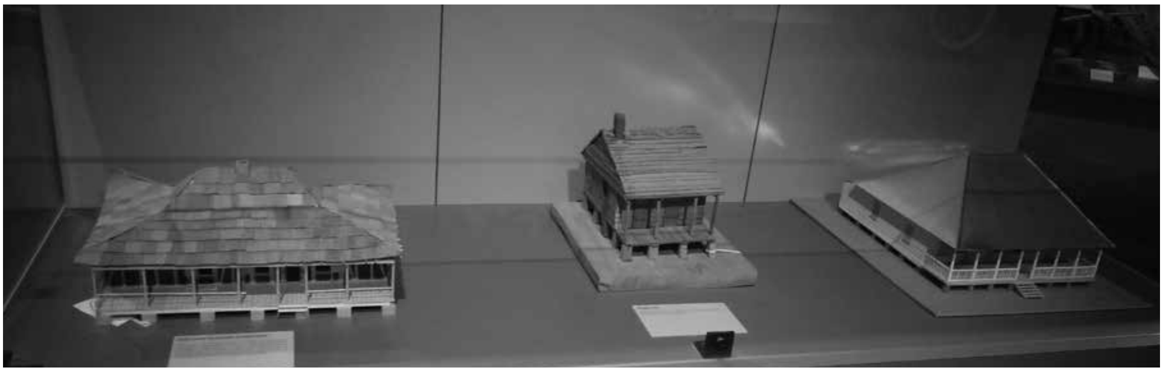
１－⑵－２　高機と館内遠景

１－⑵－３　湾岸地域の自作農

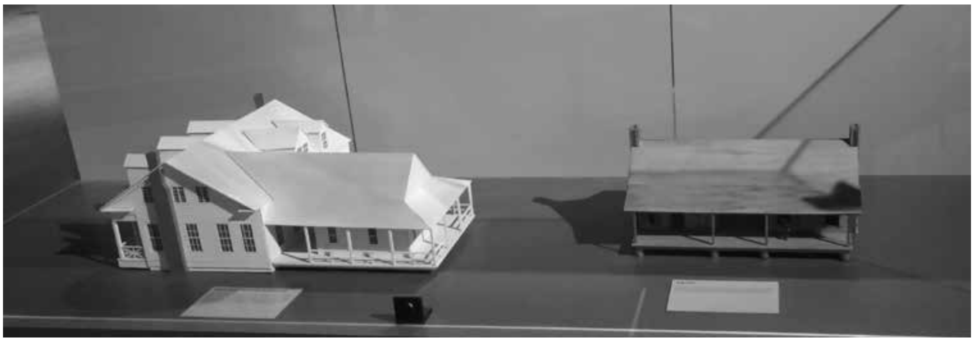
１－⑵－４　ルイジアナの産業革命

１ー⑵ー５
ルイジアナ州の産業（漁撈、綿花）、木材、
建築の特徴（コロニアル様式建築の部材）

１ー⑵ー６
野外展示の特徴的な建築を模型で展示している。
キャスター付き（可動）のケース入り。



１ー⑵ー7　左：湾岸地域特有の建築
（フレンチ・クレオールのコテージ）
中央：シングル・ペン
ワンルームの丸太小屋（外づけの煙突を伴う）



１ー⑵ー8　左：南部高地特有の建築
右：ドッグトロット・ハウス
２つの四角い部屋が共用の廊下でつながっている。
外づけの煙突が建物の両端に設置されている。

（３）屋外展示

１－⑶－①－１　飼い牛
スターとストライプ

１－⑶－①－２　農場主の家　外観

１－⑶－①－３　農場主の家　居間

１－⑶－①－４　農場主の家　食堂

１－⑶－①－５　農場主の家　寝室　ベッドの下

１－⑶－①－６　農場主の家　家具

①プランテーション居住区

１－⑶－①－７　郵便局庁舎の基礎補修

１－⑶－①－８　雑貨屋の内部　白ペンキ

１－⑶－①－９　柿葺きの屋根

1－⑶－①－10　屋根裏の様子

1－⑶－①－11　キッチン棟

1－⑶－①－12　ハーブ等の畑

1－⑶－①－13　右から２番目が館長、
左端が建築担当のジャン氏

１－⑶－①－14　奴隷小屋と周辺関連施設

②南部高地の民家ゾーン

１－⑶－②－１　サイプレス（イトスギ）の納屋

１－⑶－②－２　屋外のオーブン

１ー⑶ー②ー３　自由黒人が自ら建設した教会

１ー⑶ー②ー4a　墓地

１ー⑶ー②ー4b　遺骨焼成施設

１ー⑶ー②ー4c　Ione.E.Burden墓標

１－⑶－②－５　ジャガイモ備蓄小屋

１－⑶－②－６　ドッグトロット・ハウス全景

１－⑶－②－6a　基礎

１－⑶－②－6b　屋根の防水シート

③湾地域の民家

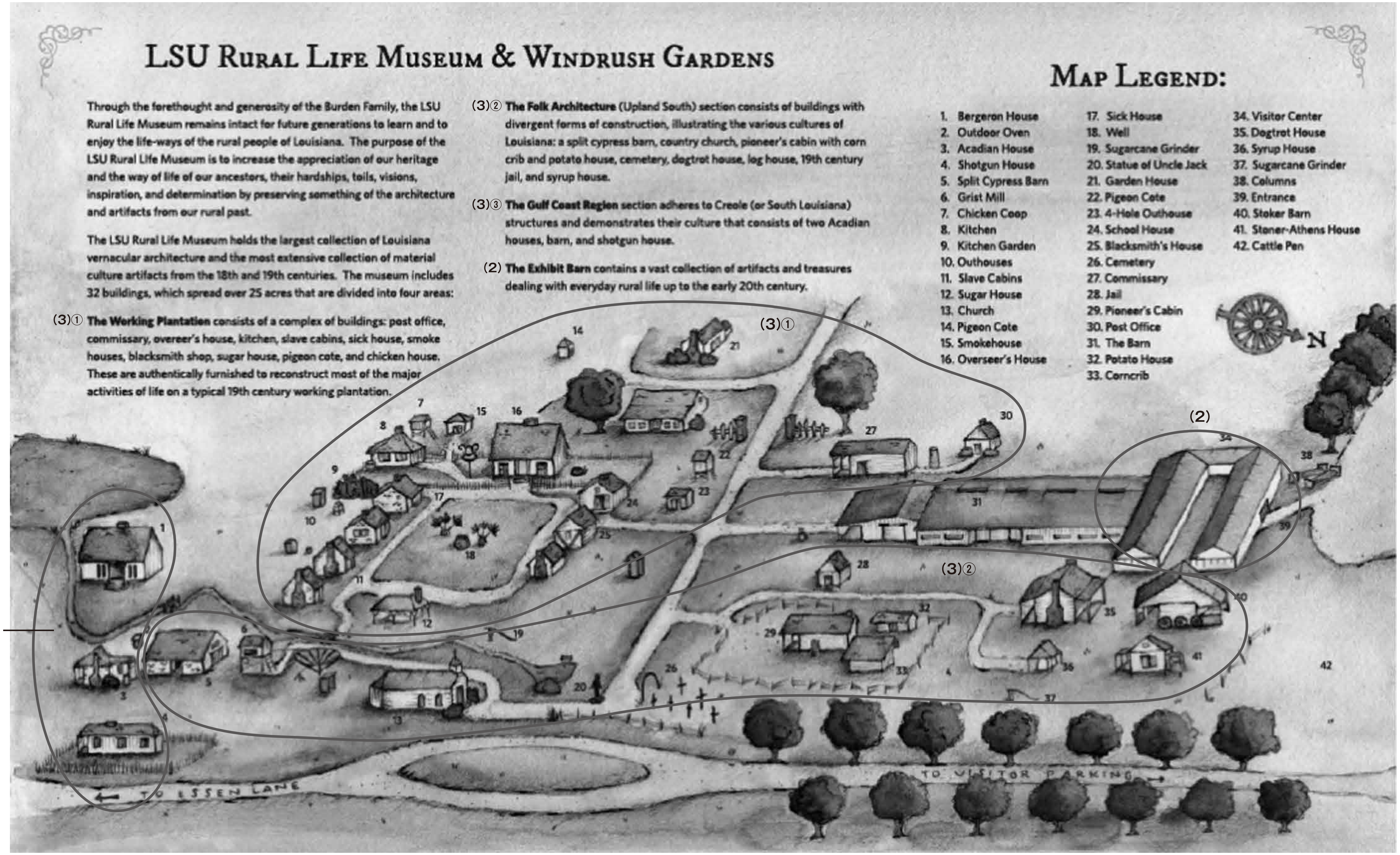
１ー⑶ー③ー1　1805年（ルイジアナ買収）以前に建てられたドイツ系ベルギー人の家（アケイディアン建築）。

１ー⑶ー③ー1a　土壁の土台を見せている。

１ー⑶ー③ー1b　蜂による土壁の被害（穴）

１ー⑶ー③ー1c　トラスの屋根、壁などアケイディアンの伝統を継いでいる。

1　ルイジアナ州立大学田園生活博物館　平面図



(3)③

２．コロニアル・ウィリアムズバーグ　写真一覧

（２）教育センター　美術館コレクションと保存館

２－⑵－１　教育センター
エントラスから施設を望む

２－⑵－２　図書館

２－⑵－３　美術館コレクションと保存館

（３）コロニアル・ウィリアムズバーグ歴史地区　修復現場

２－⑶－１歴史地区の街並みと移動車

２－⑶－①a　議事堂

２－⑶－①b　床のタイル

２－⑶－①c　家具などの修復作業

２－⑶－①d　基礎部分

２－⑶－②a　市場遠景

２－⑶－②b　市場屋根組み

２－⑶－②c　市場復元工事現場

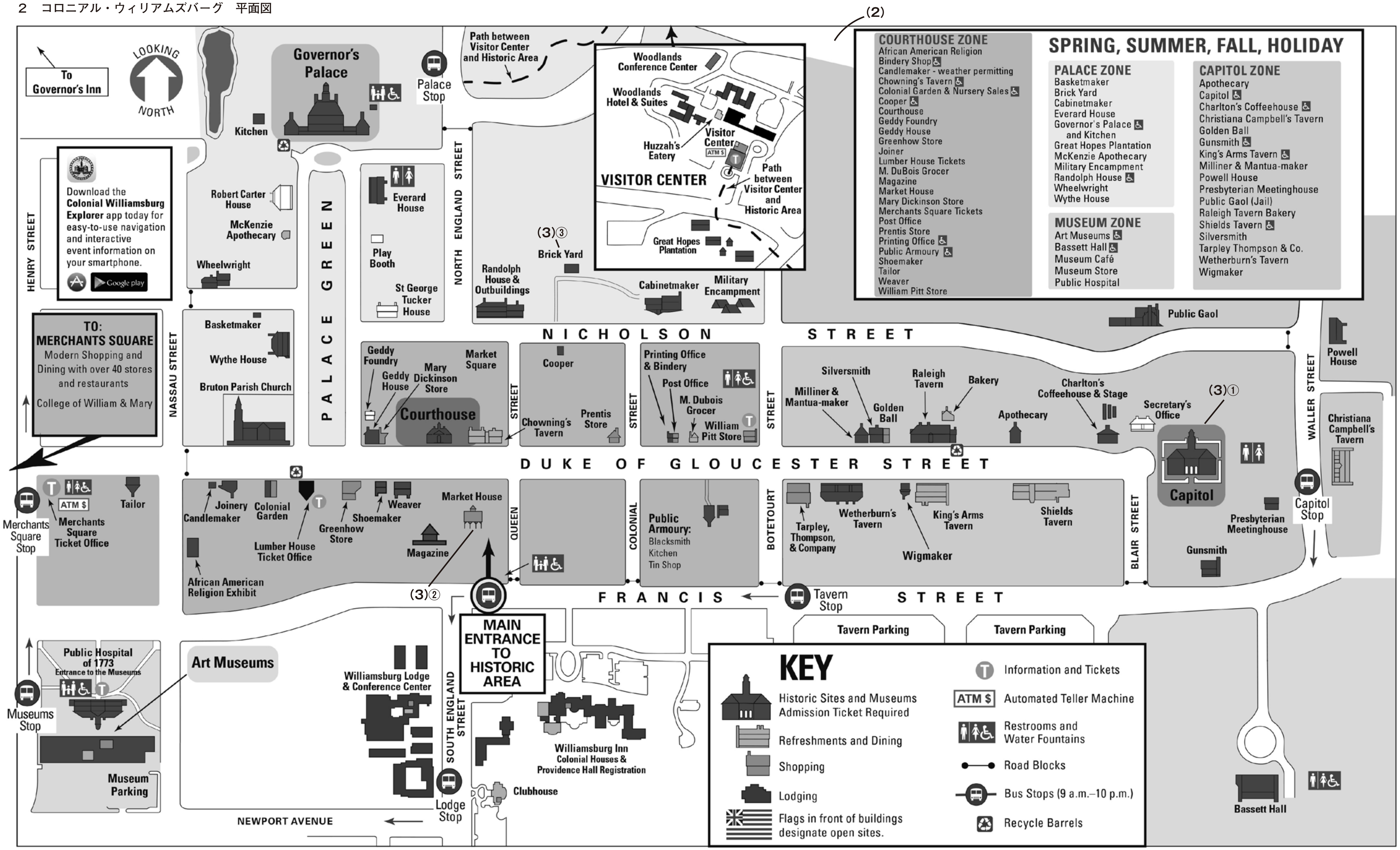
２－⑶－②d　補助照明

２－⑶－③a　煉瓦作業場：土こね・成型

２－⑶－③b　煉瓦作業場：煉瓦干し

２－⑶－③c　煉瓦作業場：煉瓦焼成用の窯

２　コロニアル・ウィリアムズバーグ　平面図



Colonial Williamsburg®

３．ヘンリー・フォード博物館　写真一覧

（２）ヘンリー・フォード博物館見学

３－⑵－１　プレクタープロムナード

３－⑵－2a　展示室入口正面

３－⑵－2b　博物館の基礎

３－⑵－３　ローザ・パークス・バス

３－⑵－４　電話機コレクション

３－⑵－５　バイオリンコレクション

３－⑵－6a　ダイマクション・ハウス

３－⑵－6b　同内部

３－⑵－7a　「進歩主義世代」ジオラマ

３－⑵－7b　「戦争世代」ジオラマ

３－⑵－7c　「ベビーブーム世代」ジオラマ

３－⑵－7d　「ジェネレーションＸ」ジオラマ

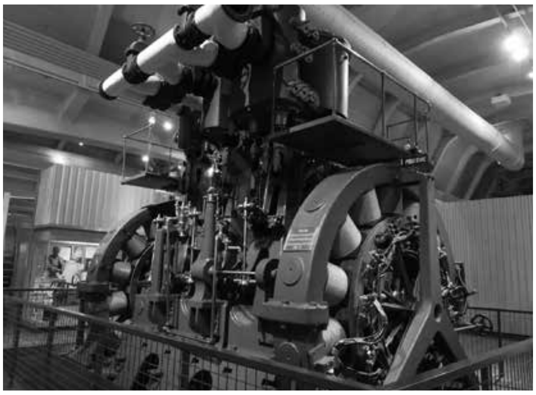
３－⑵－7e　「ジェネレーションＸ」ジオラマ
散乱する衣服

３－⑵－7f　「次世代」の展示

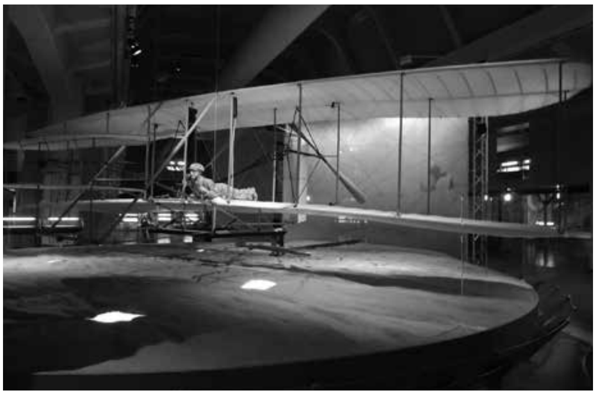
３－⑵－7g　「戦争世代」のショーケース

３－⑵－7h　「ジェネレーションＸ」のショーケース

３−⑵−8a 「動力革命」大型資料



３−⑵−8b 「動力革命」大型資料



３−⑵−９　ライト・フライヤー号レプリカ

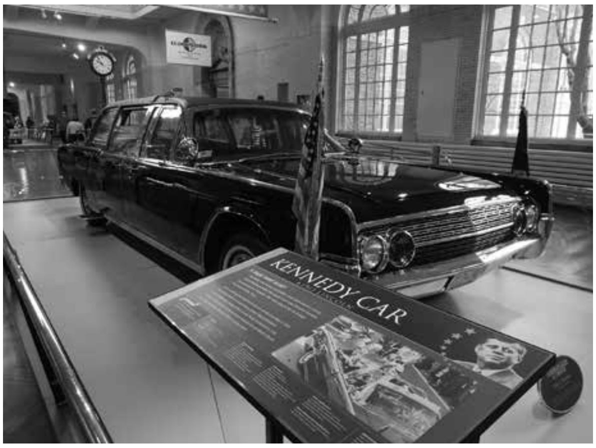
３−⑵−10a　初期の自動車

３−⑵−10b　自動車各種

３−⑵−10c　ガソリンスタンド

３−⑵−11a　機関車２台

３−⑵−11b　裏の鉄道模型コーナー



３－⑵－12a　ケネディ大統領車

３－⑵－12b　レーガン大統領車

３－⑵－13a　レーシングカー

３－⑵－13b　レーシングカー

３－⑵－13c　ホットドッグ販売車

３－⑵－13d　ホンダアコードLX

３－⑵－13e　クロスリー

３－⑵－14　Ｔ型フォードの構造

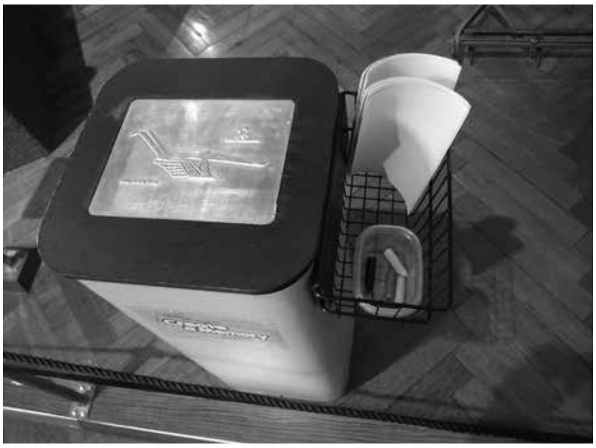
３－⑵－15a　1700年台末　米北東部の台所

３－⑵－15b　1840年頃　米東部の台所

３－⑵－15c　1890年頃　米中西部の台所

３－⑵－15d　1930年代　米国中流家庭の台所

３－⑵－16　博物館ギャラリー



３－⑵－17　農機具フォルム写し取り

３－⑵－18　発電体験装置

３－⑵－19　デザインコーナー概観

３－⑵－20　ストーブコレクション

３－⑵－21　年代別音楽視聴コーナー

（３）グリーン・フィールド・ビレッジ見学

３－⑶－1a　施設内見学用Ｔ型フォード

３－⑶－1b　Ｔ型フォード後部座席からの眺め

３－⑶－２　ファイアストーンの納屋

３－⑶－３　ウエブスターの家

３－⑶－４　フォスターの家

３－⑶－５　フォードの工場レプリカ

３－⑶－6a　ライト兄弟の家

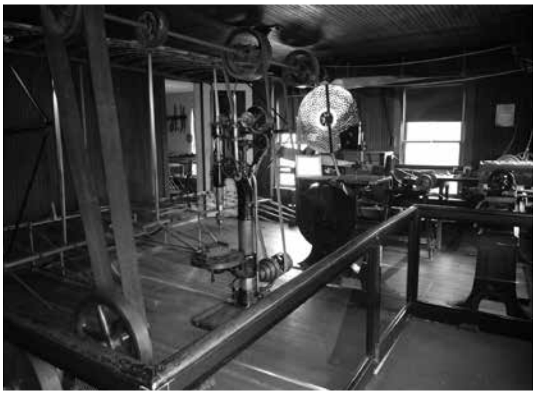
３－⑶－6b　クリスマスツリー

３－⑶－6c　２階寝室

３－⑶－6d　クリスマスの料理レプリカ

３－⑶－7a　ライト兄弟の自転車屋

３－⑶－7b　自転車屋の店先


３－⑶－7c　２階作業場

３－⑶－7d　２階　風洞実験装置

３－⑶－８　馬車用の白馬

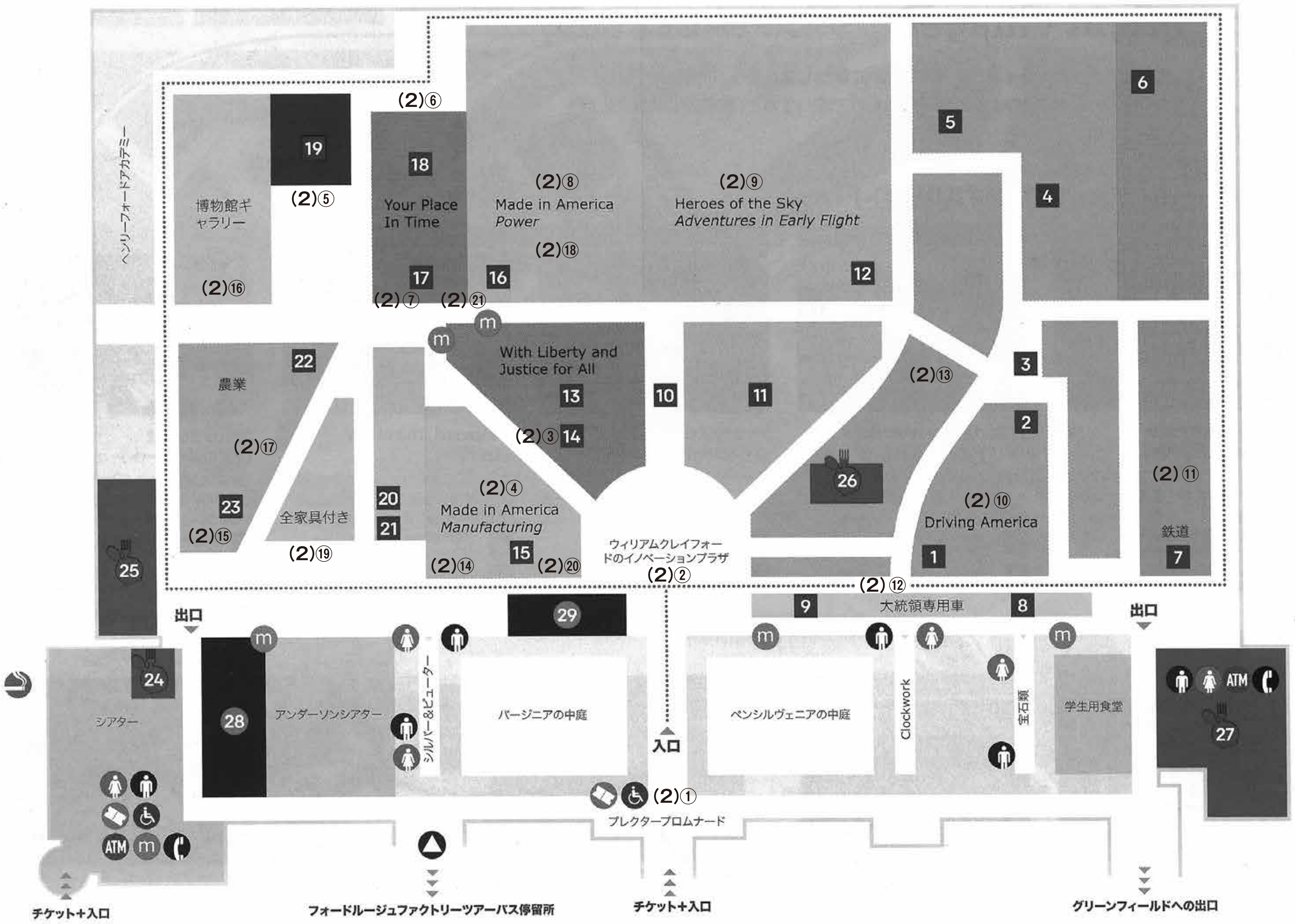
（４）Lovett ホールの図書室にてインタビュー

３ー⑷ー1a, b　右の写真左手前が通訳、右回りに施設担当Jerome氏、学芸部長Greuther氏、コレクション運用部門課長Long氏、事業企画部門課長Johnson氏、コレクション部門課長（学芸員）McCabe氏、阿部

３ー⑷ー2a　階段付近修復作業

３ー⑷ー2b　ボウルルーム

３　ヘンリー・フォード博物館　平面図



マップキー

- 博物館の必見
- 一般チケット＆メンバーシップ
- 女性用トイレ
- 男性用トイレ
- ATM
- ファクトリーツアーバス停留所
- 特別ニーズ用レンタル
- Mold-A-Rama の記念品
- 指定喫煙エリア
- 電話
- 歩行ルート（2周 = 1マイル）
  オークウッドヘルスケアによるスポンサー

3　グリーン・フィールド・ビレッジ（ヘンリー・フォード博物館）　平面図

表１　米国の野外博物館における復元建造物の維持修繕に関する考え方及び実施状況　　　　江戸東京たてもの園

基本情報	博物館名	ルイジアナ州立大学田園生活博物館 LSU Rural Life Museum	コロニアル・ウィリアムズバーグ Colonial Williamsburg	グリーンフィールド・ヴィレッジ（ヘンリー・フォード・ミュージアム内）Green field village
	所在地	ルイジアナ州バトンルージュ	ヴァージニア州ウィリアムズバーグ	ミシガン州ディアボーン
	開館年	1972年（昭和47）　※一般公開開始は1981年	1928年（昭和3）	1929年（昭和4）
	年間入館者数	約7万2千人	70～75万人	170万人（ヘンリー・フォード・ミュージアム）
	建造物数	約35棟	603棟　うち88棟は当時のもの	83棟　ほかにフォードTや蒸気機関車などあり
	時代年代	19世紀から20世紀初期	17世紀後半から19世紀初期	17世紀から20世紀前期
	運営主体	LSU Foundation Development（非営利団体）	コロニアル・ウィリアムズバーグ財団（非営利団体）	エジソン学会（フォード財団）非営利団体
	設立目的	施設・土地の所有者バーデン一族から、ルイジアナ州立大学が1965-95年に寄贈を受けて設立	ヴァージニア州の首都として栄えたウィリアムズバーグを歴史的地区とし、アメリカ合衆国の植民地時代を再現。1775年（アメリカ独立戦争勃発）頃に焦点を当てている。	アメリカ文化に関心が高かったヘンリー・フォードが、初期のフォードの工場を設置していたディアボーンに野外博物館を設立。全米から建物を収集。
修復に関わる情報	予算		修繕費：45万ドル（年間の塗装費用）	修繕費：50万ドル（屋根の保全や設備機器の保全などに使用）
	建築専門スタッフ	建築担当1名、修復担当1名	４名	修理担当主任、その下に技術職スタッフ数名
	修復におけるオーセンティシティ ・真正性 ・歴史的建造物の美的価値・歴史的価値の保全 ・意匠、材質、機能、技法等の保全	・表面などに古材を使うこともあるが、基本的に現代の部材を使用。 ・Overseer's House（プランテーション主の家）の屋根の葺き替えにあたり、屋根材は1970年代の材料をそろえ、修復。屋根材の収集に苦労しながら実施。 ・屋根の防水にタールを塗った防水シートを用いて修復したが、湿気が抜けず、屋根葺き材を傷めてしまった。この地域では「息ができる建物」という考え方に基づき、湿気をいかにして抜くかが重要。 ・見えない場所には、現代の技術で釘打ちを施す。 ・新材を使用する場合、色合わせを実施。 ・使用しなかった古材は、基本的に保存。 ・Overseer's Houseの屋根の修復の際、痛みの少ない野地板を保存し、もう片面の修理にあたり再利用する予定。	・内務省長官発行のガイドライン（材料の処理や建物の取り扱い等の基準）に基づき、修復を実施。 ・できる限り伝統的な工法を用いる。 ・1940年代、建物と基礎をボルトで繋ぐ方法で修理したが、基礎を傷めた。 ・古材に新材を混ぜることはしない。 ・新材のみ使用することはあるが、当時の材に近いものをイギリスから取り寄せる（タイル・木材）。 ・アメリカ国内で入手が難しい材料は、原産国から取り寄せて使用（タイル・木材）。 ・創建当時の製法や材料を用い、館内で製造する材料もある（レンガ・モルタル）。効率的な製造方法を開発。 ・新材を使用する場合、色合わせを実施。是非について論争があり、新材にはマーキングを施す。以前はマーキングをしていなかったため、新旧の判断ができない。 ・現在の木材は完全に乾燥しており、水分を吸収したり膨張したりしないため、使いにくい。古材は使いやすい一方、収集が難しいが入手する手立てはある。 ・使用しなかった古材は保存。ただし、他のコレクションに悪影響を及ぼす古材は除外。部材は美術館内でコーナーごとに展示。 ・他の建物の部材は、使用しない。	・建物によるが、外から見える部分やオリジナルな状態を保ちたい部分は、伝統的な材料と工法を用いる。見えない部分は、現代的な工法を建物に影響を与えない範囲で用いる。 ・古い材料に悪影響がないか検証してから新材を使用。新材の使用箇所は、写真等で記録。 ・木材は同じ産地・年代のものを使用。鍵など壊れやすいものは新しいものに古色を施し、使用。 ・新材を用いた場合、色合わせを実施。 ・デザイン性があるなど、特徴的なものを中心に、古材を保存。ただし、床の一部を変えた時などは、古材を保存しない。 ・他の建物の部材は、使用しない。ただし、ドアノブやガラスなど、部分的にたまに再利用することはある。ほとんどは新たに製作。外注もするが、館内でも製造可能。鍵など、セキュリティが必要な個所は、現代の製品を使用。
	劣化調査と修復方法	・修復の方法と材料の選択は、修復担当者の裁量に任されている。 ・ボランティアも修復作業に参加。 ・日常的に点検調査を実施。 ・バルコニーの修復サイクルは15年に1度。	・修復にあたっては、財団内にチームを作り、方向性を決定する。 ・外壁の塗装は年間約70棟、10年で1サイクルという計画で実施。 ・日常的に点検調査を実施。 ・修理の現場は仮囲いをせず、公開する方針。それによって建物の保存に対する理解や興味、関心が促進され、寄付も集まる。 ・現在、人が住んでいたり、寄付者に貸し出している建物もある。コンセントの位置などを変えないで、工夫しながら生活してもらっている。 ・バリアフリー対策のため、建物へのダメージが少ない範囲で、スロープやエレベーターを設置。設置できない建物は、映像やタブレットの貸出しで対応。	・日常の小規模な修繕の場合は、大工仕事や塗装、電気設備関係の「ファシリティスタッフ」がおり実施している。大規模な修繕の場合は、専門の企業に発注。 ・部材の製造をスタッフ、ボランティアが実施。 ・日常的に点検調査を実施。 ・バリアフリー対策にあたり、オリジナルの構造は変えない。ビデオなどを入口に設置。建物内にスタッフを配置し、iPadで紹介（当時の衣装を着たスタッフはiPadを持たない）。 ・日常の小規模な修繕の場合は、大工仕事や塗装、電気設備関係の「ファシリティスタッフ」がおり実施している。大規模な修繕の場合は、専門の企業に発注。 ・施設に関わるいろいろな人から不具合の報告があがってくるシステムがある。その中からプライオリティの高いものから実施する。
	有識者による助言等	・大きなプロジェクトの場合、修復方法と材料の選択は、館長やルイジアナ州立大学教員等の委員に図って決定。		・新規に建物を移築する際は、組織内で委員会を作り、検討したうえで意思決定をしている。
	建造物の情報	・ハリケーン・カトリーナの被害を受けた一般の建物の復旧に、移築建造物の知恵（礎石による高床、金物を不使用）が生かされ、新しい建築基準が策定された。	・コロニアル内に建築されていた科学的証明のある建造物以外は建築不可。近代的な建造物は建設しない。	・新材を使用した時は、写真撮影し記録する。
	自然災害、動植物等による劣化	・ハリケーンによる被害 ・虫害により土壁に穴	"・ハリケーン対策として、館内に対策委員会を設置し、防災対策をする。窓の保護、窓近くの資料の移動、窓への板の打ち付け（昔からの方法）、排水溝のチェック、土嚢積み、工具類の入った緊急対応キットの配置等。 ・5年に1回程度、竜巻が発生するときは、何もできない。"	・洪水対策として、ストームポンプを設置。 ・積雪のため雨樋が凍結、膨張し、壁を補修した。
	「丸二商店」劣化緊急修繕工事との関連事項	・修繕工事の実施にあたって、現在主流となっている工法や材料を用いる際には、建物に悪影響を及ぼさないか検証をする。 ・丸二商店の屋根裏や壁の内側、屋根の葺き替えなど、見えない場所の修繕には、新しい材料や工法で施工することを可能とする。また、見える部分にはできるだけ創建当時の材料や工法を用いる。 ・修繕工事の際に取り外し、再用しなかった銅板や柱、小屋束、母屋、垂木などの古材は保存する。 ・丸二商店の屋根葺き替えに伴い使用する防水シートは、通気性などを考慮して施工する。 ・ある程度まとめてからの補修工事だと費用がかかるので、小規模な補修工事の積み重ねの方が割安。 ・材料は安く入手できても、人手不足などにより修理する人工のコストが高く、工事費が割高になってしまう。	・古い銅板と新しい銅板を混用するのは、金属の膨張率の違いからかえって水が入り込む可能性があるので、リスキーである。丸二商店のファサードを修繕するには、新旧の銅板の混用を抑える。 ・修繕工事で新たに用いる材料は、創建当時のものと同等の材料や製造方法で製作されたものを使用する。 ・修繕工事の際に取り外し、再用しなかった銅板や柱、小屋束、母屋、垂木などの古材は保存する。 ・修繕工事に使用する材料には、ほかの建物で使用していたものは利用しない。 ・修繕工事で新しい材料を使用した時は、履歴を残す。	・丸二商店のファサードの銅板や屋根葺き材の交換、防水シートの張替え、腐朽した柱の根継ぎなどで新しい材料を使用するときは、古い材料に悪影響が出ないよう十分に検証をしてから使用し、使用した履歴をしっかりと残す。 ・丸二商店のファサードなど、外から見える部分やオリジナルな状態を保ちたい部分は、伝統的な材料や工法を用いる。 ・丸二商店のファサードで使用していた銅板のうち取り外し再利用しなかったものについて、デザイン性があるものや特徴的なものを中心に古材を保存する。
	建築基準法への対応	－	・ウィリアムズバーグ市に建築審査会があり、建築に関するガイドラインを定めている。建築の規制は州によって違い、ウィリアムズバーグ市は独自のガイドラインも持つ。当館はさらに厳格な基準を持っている。	－